

基準地震動を解く

伊方原発

四国電力伊方原発の基準地震動570μは、調査に基づいて活断層の位置や形状で原発に最も影響が大きくなるよう計算した「断層モデル」と（小規模な地震観測記録から大規模地震の波形を合成してつくり出す）経験的な方法で総合的に決めている。

基準地震動は計算で出た一番大きい揺れの値のように思われることがあるが、そうではない。（四電が原子力規制委員会に提出した）資料を見る限り、570μじゃないといけないという根拠はなく、もつとよほど大きくてもいい。
地震動評価の計算は新

3 京都大名誉教授 入倉 孝次郎氏



いりくら・こうじろう 68年京都大大学院理学研究科・地球物理学専攻博士課程中退。同大副学長や日本地震学会会長などを歴任。01～12年、内閣府原子力安全委員会専門委員。強震動地震学。73歳。

3/29 余裕ある設計 確認重要

3/29 論文を参考にしており、恣意（しい）的な部分はない。あるとしたら（断層）安値。私は科学的な式を余裕を持って決めた方が安心だが、それは経費だ。使った計算方法を提案し（を示す）必要はない。平均像を求めるもの。平に配管など数千〜1万カ所をチェックした。基準地震動を上げれば設備を全て調べ直さないといいないので大変だろう。重要なのはこの裕度を確保することだ。旧原子力安全委員会の耐震バックチェックでも裕度の計算はやってきたが、民主党政権時に行ったストレステスト（耐性評価）で、それほど余裕がなかった。これは重要なポイントで、規制委の審査できちんと示されるだろう。

570μのままにして、それを多少超す地震が来たとしてもすぐ壊れることはないと思う。680μとしていた女川原発（宮城県）でも、東日本大震災のときに600μを相対地震動だったが、長代理がいるが、全ての耐えられた。伊方でもそれくらい余裕は持っているはず。基準以上は揺れでも大丈夫なように余裕のある設計が行われるべき（聞き手・藤中健、阪和）